

綴り字のシーズン

2005(平成17)年10月25日鑑賞(東宝試写室)



監督=スコット・マクギー&デヴィッド・シーゲル/出演=フローラ・クロス/リチャード・ギア/ジュリエット・ピノシュ/マックス・ミンゲラ/ケイト・ボスワース (20世紀フォックス映画配給/2005年アメリカ映画/105分)

……この映画は9歳から15歳までの子供が出演できるアメリカの「スペリング・コンテスト」の中でちょっと変わった才能を発揮していく少女を主人公とし、その家族の崩壊と絆を描くもの。スペリング・コンテスト自体は単純な競技だが、この映画ではユダヤ神秘主義を实践しようとする父親を頂点とするナウマン家の4人のファミリーそれぞれの人間性に焦点が当てられている。この映画が描こうとしているテーマはよくわかるものの、4人の家族の心理は複雑で、その理解はかなり難しそう……。

スペリング・コンテストとは？

パンフレットによれば、スペリング・コンテストの元となったのは幼い子供に綴りを教える楽しい方法として使用されていた「スペリング・ビー」。そして、これはテレビでも放映される人気イベントに成長したらしい。このスペリング・コンテストに出場できるのは9歳から15歳までの子供で、また地区大会を勝ち抜いた250人だけが全米大会に出場できるとのこと。

もっとも、私がこの映画からスペリング・コンテストを見る限り、これはきわめて単純な競技であるうえ、質問される単語の難易のバラツキがあるため、かなり運・不運が分かれそうな感じ。したがって、お遊びとか教育の1つのテクニクとしては有効だろうが、賞金をかけたコンテストとしてふさわしいかどうかについて、まず疑問に思ったが……。

完璧そうだが、ヘンな両親……？

この映画は、スプリング・コンテストへの出場から始まった家族のあり方を描いたもの。そして表の主人公は、スプリング・コンテストに出場して異様な(?)才能を発揮する娘のイライザ(フローラ・クロス)だが、陰の主人公はナウマン家の家長である父親のソール(リチャード・ギア)。宗教学を専攻し、ユダヤ神秘主義にのめり込んでいる大学教授の父親といえ、それだけでもかなり変わった父親だが、母親のミリアム(ジュリエット・ビノシュ)も科学者というから、それだけで変わった両親と想像できるというもの……。

しかも物語の進行につれて明らかになっていくのは、この両親は一見仲睦まじい夫婦のように見えながら、あまりにも多くの内面上の矛盾を抱えた夫婦だということ。

もっとも、男の私にはこの父親がちょっとヘンなことはよくわかるが、母親がなぜ精神を病んでいくのかについては、この映画から十分理解できない……。ひょっとして、それは私が鈍感なせい……？

いるいる、こんなオヤジ！

父親のソールは頼りになる存在というだけでなく、家族思いで優しく、料理好き。しかも、自分が弾くバイオリンと息子のアロン(マックス・ミンゲラ)が弾くチェロとの合奏を楽しむという芸術的感性まで備えた、ある意味パーフェクトな父親。しかし、実は問題あり！ それはよくあるケースで、ホントは妻や子供たちのことを何もわかっておらず、自分で勝手にこうなんだと思込んでいるタイプの典型だということ。

こんな父親が、ある時急に子供から裏切られたり、妻からシッペ返しを食らうことはよくある話。今年秋のテレビドラマとして始まった、渡哲也と松坂慶子共演による『熟年離婚』などは、モロにそれがテーマ。自分は必死で頑張っており、完璧な父親そして完璧な夫として認められていると思っけていても、実はそれは大きな錯覚だったという話は、悲しいけれどよくある話。いるいる、こんなソールのような父親はあちこちに……。

もともとナウマン家はバラバラ……？

もともとソールの期待の星は息子のアーロン。なぜならアーロンは学業優秀で、父親の希望に沿ってヘブライ語まで勉強しているのだから……。しかし、このアーロンは既に年齢的に当然反抗期に入っており、フツフツと沸き上がる父親への不満がうっ積していた……。そして、アーロンの場合それは、たまたま知り合った美しいヒンズー教徒の娘チャーリ（ケイト・ボスワース）と結びつくことになったため、父親に対する不満が宗教色を帯びてきたから大変なことに……。

他方、妻のミリアムもソールに対しては良き妻を演じていたが、内心は大きな不満が……。その不満は、彼女の場合精神障害にまで発展したのだから、それがいかに大きかったかは十分に想像できる。このようにナウマン家はもともとバラバラだったのであり、娘のイライザですらそれに気づいていた。そして、それに気づいていなかったのはソールだけ……。

なぜイライザにこんな才能が……？

この映画は、たまたまスペリング・コンテストの地区大会に出場したイライザが圧倒的な強さで勝ち進んでいったことが大きなポイント。しかし、なぜイライザがそんな才能を持っていたのかは、残念ながらこの映画からは十分見えてこない……。もっとも、父親のソールが長い間研究し、到達しようとしても達することができなかったある境地に、このイライザが達しているのかもしれないということは、ストーリー展開上よく読み取れるが……。こんなイライザを見て、父親の興味の対象（？）が、それまで期待をかけていた息子のアーロンから妹のイライザに移っていったのは当然。そしてまたそれが、ナウマン家に新たな大きな問題を引き起こすことになったのも当然。ただ私としては、なぜこのイライザがこんな特殊な才能を持っていたのかについて、映画の中でもう少し合理的な説明をしてほしかったと思うのだが……。

あまりにも難解なユダヤ神秘主義とカバラ

ナウマン家の中心であるソールはユダヤ神秘主義を信じており、そのコンセプト

トであるカバラを信じているとのこと。そしてパンフレットの中には、「LET'S STUDY」としてこれらの解説がされているが、これをいくら読んで私の頭にはチンプンカンプン……？

さらに、映画の中でソールがイライザに対して教えている13世紀のカバラ学者アブラハム・アブラフィアが創り上げたという儀式についても、私にはさっぱり理解不能。もちろんスクリーンでは、もっともらしくいろいろと説明されるし、それなりの演技が展開されているのだが、どうもこういう神がかり的な話はあまりにも難解かつ不自然で、私には理解不可能……？

「折り紙」は英語 or 日本語

スペリング・コンテストの地区大会そして全国大会では、いろいろな出場者に対して実に多くの単語が投げかけられるが、この映画でキーワードとなる単語は「折り紙」。その綴りは「ORIGAMI」だが、この「折り紙」という単語は英語それとも日本語……？

父親と2人だけの特訓の中で、この単語も予習していたイライザに対して決勝戦で出された質問が、この「折り紙」というのはあまりにもヤマが当たりすぎていて現実離れしているが、それはさておき、そこでこのイライザがとった行動がこの映画のすべてのハイライト。さて、イライザがとった行動とは……？

家族の崩壊と家族の絆がテーマだが……？

この映画のテーマは、スペリング・コンテストをめぐる展開される家族の崩壊と家族の絆。そして、スペリング・コンテストの全国大会に出場し、決勝戦まで勝ち残り、いよいよ優勝かという時点で示すイライザの行動がすべてのポイント。それはそれでわかるのだが、果たしてそれだけで家族の崩壊をくい止め、家族の絆を取り戻すことができるのだろうか……？

2005(平成17)年10月27日記